い～な
診療所
あまみ　中　中　央　つなぐの　さくら
事務局
研究所
しらさぎ

大阪＋知的障害＋地域＋おもろい＝創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2680 号 2015.10.20 発行

===

自宅で介護、訪問レッスン　千葉市が無料支援

朝日新聞　2015 年 10 月 19 日

車いすからソファに移動する際の支援のコツを学ぶ香取初江さん（左）。敬子さんの体にタオルを巻くと、支えやすいというアドバイスを実践した＝千葉市若葉区

自宅で高齢者を介護する家族のもとにホームヘルパーや介護福祉士が出向き、状況にあった介護方法を伝える「訪問レッスン」を、千葉市が１０月から始めた。介護を必要とする高齢者が増える中、技術支援をすることで介護者の負担を減らしたいという。

「お風呂から出るとき、車いすに移動するのが難しくて。母にはこうやって扉のとこにつかまってもらってるんだけど、もっと安全な方法はないかしら」

今月上旬、千葉市若葉区の香取初江さん（６６）は自宅を訪れた介護福祉士の女性にたずねた。車いすで生活する母・敬子さん（９７）の入浴支援の相談だ。

実際に浴室内で普段の様子も再現した。すると、女性はさっと浴室内を見渡して「車いすごと浴室に入れちゃえばいいんです。せっかく広い空間があるので有効に使いましょう」とアドバイス。さっそくその場でやったら、うまくいった。「自宅ならではの視点ですね」と初江さん。敬子さんも安心顔だ。

初江さんは両親と３人暮らし。父親の三郎さんは今年１００歳を迎えた。毎年家族で旅行をしたり、東京ディズニーシーに行ったりするほど活動的だが、三郎さんは要介護１、敬子さんは同２。数年前から入浴や排泄（はいせつ）など日常生活で支援が必要な場面が増えた。

これまでも、介護の講習会に参加した経験がある。勉強になったが、「もっと具体的なことが知りたい」と思っていた。段差やスペースなどの状態や、食事や入浴など、介護の必要な場面は、家庭ごとに違うからだ。

千葉市の要支援・要介護認定者は２０１４年９月末時点で約３万５千人にのぼり、２５年度には１・９倍の約６万６千人に増える見込みだ。在宅介護をする市民へのアンケートでは「身体的な負担が大きい」「適切な介護の方法がわからない」という声が多かった。

そこで市は１０月から、自宅で高齢者を介護する家族に専門職が出向き、個別事情に合った介護技術を伝える訪問レッスンを始めた。介護福祉士などの資格を持つ約１８０人が講師役として登録。介護のコツを教えることで、介護者の負担を減らしたいという。政令指定市では初の取り組みで、約１時間のレッスン料は無料。担当者は「正しい方法や知識がないと介護疲れになってしまうこともある。困ったときはぜひ相談してほしい」と話す。

利用対象者は、千葉市に住所があり在宅で高齢者を介護している家族。電話やＦＡＸで申し込む。問い合わせは市家族介護者支援センター（043・302・2017）へ。（戸田政考）

おむつ外し　１９９０年の平均、２歳４カ月→０７年、３歳４カ月

朝日新聞　2015 年 10 月 19 日

親子が参加したトイレトレーニング教室。悩みに講師の渡辺敦子さん（左）が答えた＝神奈川県鎌倉市

子どもがおむつを外す年齢が上がっています。祖父母世代からは「遅すぎるのでは」と孫を心配する声も聞こえます。どんなタイミングで、おむつを外す練習を始めたらいいのでしょうか。

■昔は１歳で取れた？

「昔は１歳でおむつがとれることも珍しくなかった。最近は３歳前後が普通になっています」。神奈川県鎌倉市で５日にあったトイレトレーニングのセミナーで、講師の渡辺敦子さん（３９）が説明した。親たちがおむつ外しの方法などを学ぶ、日本コミュニケーション育児協会認定の教室だ。

参加者は、祖父母から「おむつを取るのが遅すぎる」と言われたり、すでにおむつが外れた他の子と比較したりして、悩んでいる人が少なくないという。

日本小児保健協会の調査で、排尿のしつけをうけていない子の割合は、１９８０年度は１歳～２歳未満で２８％だった。２０１０年度は、７２％に増えている。

子供用おむつを販売するＰ＆Ｇの調査では、昼夜のおむつが外れたのは、９０年には平均２歳４カ月だったが、０７年は平均３歳４カ月だった。

子育て家庭のニーズを見込み、メーカー各社は成長しても使える大きなサイズのおむつを販売している。

Ｐ＆Ｇは２月、１５～２８キロの体重の子を想定したおむつを再発売した。０９年に発売した後、東日本大震災の影響で終了したが、要望を受けて、改良して再開したという。同社は「市場は今後も拡大する」と見る。花王も１３年に１５～２８キロのサイズを発売。ユニ・チャームも０４年から、１３～２５キロのサイズを販売している。各社とも「売れ行きは好調」という。

おむつ外れが遅くなった理由について、ベネッセ教育総合研究所の真田美恵子主任研究員は「育児雑誌などを通して『子どもの発達を見ながら進め、焦らなくてよい』という情報が広まったためではないか。祖父母世代が使うことが多かった布おむつに比べ、紙おむつは親の手間がかからないため、おむつ外しを急がなくなった可能性もある」と話す。

母子健康手帳の記述も変わっている。厚生労働省によると、８０年は、１歳半ごろに「おむつをとろうとしていますか」という記述があった。現在は、２歳ごろに「少しずつ、おむつを取る練習を始めましょう」とする市区町村が多い。

■年齢よりも「３条件」

では、どんな時期がおむつ外しに適しているのか。日本夜尿症学会の常任理事で、世田谷子どもクリニックの帆足英一名誉院長は「子どもが、自分で尿意を感じられるようになったタイミングで、外す練習を始めて」とアドバイスする。

生まれたばかりの子どもは脳が未発達なので、膀胱（ぼうこう）におしっこがたまったことを感じることができない。１～２歳半ごろにはわかるようになる場合が多いが、発達には個人差が大きい。

このため、子どもの年齢ではなく、（１）歩ける（２）言葉をある程度理解し、数語は話せる（３）おしっこの間隔が１時間半～２時間ほど空く、の三つがそろっていることが、尿意を感じられる目安になるという。

カドカワの通信制高校沖縄に開校へ、生徒１万人募集　　読売新聞　2015 年 10 月 16 日

出版大手のＫＡＤＯＫＡＷＡと動画配信のドワンゴが経営統合したカドカワ（東京都中

央区）が１４日、２０１６年春沖縄県に開校する単位制の広域通信制高校のカリキュラムなどを発表し、生徒募集を開始した。
　校名は「Ｎ高等学校」で、同県うるま市の廃校を改修し、本校舎として使う。授業はインターネット動画サイト「ニコニコ動画」のシステムを改良して実施。生徒の交流もネット上で行う。
　作家の森村誠一さんらを講師に迎え、小説やアニメ、ゲームの創作に取り組んだり、刀鍛冶や狩猟などを体験したりする課外授業を予定している。
　初年度の入学定員は１万人。川上量生社長は「校名の『Ｎ』は『ネット』や『仲間』など自由に解釈してほしい」と話している。

＜身元不明者＞保護９７人公表せず　東京・神奈川、公表２人

毎日新聞　2015 年 10 月 19 日

◇両都県、個人情報保護条例の制約を挙げる

　認知症などで保護され身元が分からない人の情報を載せるインターネットの特設サイトに東京都と神奈川県が各１人分しか公表していないにもかかわらず、実際にはそれぞれ４９人と５０人の身元不明者がいたことが分かった。公表が進まない理由として両都県は個人情報保護条例の制約を挙げるが、他の自治体は公表して身元判明にも結びついていることから、専門家は両都県の対応を厳しく批判している。
　身元不明のまま保護されている人を巡っては、厚生労働省が昨年、各都道府県を通じて初めて全国調査し、昨年５月時点で３４都道府県に３４６人いることが判明した。こうしたことから厚労省は昨年８月、家族による捜索に役立ててもらおうと、ホームページ内に設置した特設サイトに個別の情報を掲載するよう各都道府県に呼び掛けた。
　千葉県や静岡県が写真や保護時の状況など何らかの情報を全員分公表する一方、東京の掲載は稲城市で保護された１人、神奈川は鎌倉市の１人のみで、管内の身元不明者総数すら公表していない。毎日新聞が両都県に情報公開請求したところ、性別や推定年齢、身元確認につながる「有力情報」などの個別内容は黒塗りされたが、昨年５月時点の市区町村別の人数は開示され、東京は計４９人、神奈川は計５０人いた。
　大半の身元不明者を公表していないことについて両都県は、個人情報保護条例に本人の同意がなければ第三者への情報提供を制限するなどの規定があることを挙げた。その上で、東京は「掲載するかしないかは保護した市区町村の判断」、神奈川は「公表の意思を確認できない人は非掲載」と説明している。
　一方、全員分の情報を公表した千葉はこれまで６人中３人、静岡は１７人中５人の身元が判明した。また、大阪府は今年５月、性別や推定年齢などの情報掲載は法令に抵触しないと通知し、市町村に積極的な公表を要請。その結果、３９人中３８人の性別や推定年齢、身長、体重、保護年月、当時の服装、所持品などが現在公表されている。
　厚労省も６月、「情報掲載は家族らが自治体へ問い合わせるきっかけとなり、身元判明につながり得る。できる限りの情報掲載が重要」と改めて全国に通知し、身元不明者総数の公表なども求めた。しかし、この通知後も東京、神奈川の掲載内容には変化がない。
　個人情報保護の問題に詳しい清水勉弁護士は「身元不明者の情報は本人を元の生活に無事帰すため行政が集めたもので、情報の公表は個人情報保護条例の解釈として問題はない。高齢の身元不明者は体調悪化や老化が進むこともあり、一日も早い対応が必要。実践している県では身元判明の成果が出ている。この動きに呼応しない東京と神奈川の態度は反人権的で意図的な怠慢だ」と指摘している。【銭場裕司】

＜障害者差別解消条例＞当事者団体が勉強会　　河北新報　2015 年 10 月 19 日

　仙台市が市民に意見を募集している「障害者差別解消条例（仮称）」の中間案について、

障害者団体で組織する「誰もが暮らしやすいまちづくりをすすめる仙台連絡協議会」（条例の会仙台）は１９日、案の内容と当事者から見た問題点を説明する勉強会を開く。
　中間案は障害が理由の差別解消を目指し、基本理念や市、事業者、市民の責務を定める。福祉や医療、教育サービスや公共交通機関の利用制限、施設入所の強制といった不当な扱いを禁止し、市や事業者に社会的障壁をなくす義務などを盛り込んだ。
　障害者も参加する市障害者施策推進協議会が検討を重ねてきた。中間案に対し、条例の会仙台は「検討内容が十分反映されていない」と指摘。相談機関設置や条例の見直し規定、バリアフリー化への助成制度などを求める。
　勉強会に関し、杉山裕信代表（４９）は「条例制定の目的や障害者差別の現状を知ってもらい、条例が不十分な内容にならないよう市に声を上げてほしい」と参加を呼び掛ける。
　勉強会は青葉区の市シルバーセンターで午後７時から。連絡先は条例の会仙台事務局０２２（２４８）６０５４。

「自己責任だ」と説教しても、貧困問題は解決しない
大西連×柏木ハルコ『すぐそばにある「貧困」』刊行記念対談
シノドスジャーナル　2015年10月19日
　20代にしてNPO法人「もやい」理事長になった大西連氏の初の単著『すぐそばにある「貧困」』が上梓された。生活困窮者支援の現場をありのまま描くノンフィクションだ。今回は、刊行を記念して『健康で文化的な最低限度の生活』（小学館）作者である柏木ハルコ氏と対談を行った。（構成／山本菜々子）
「貧困」を描くむずかしさ
大西　今回は、ぼくのはじめての本『すぐそばにある「貧困」』の記念対談ということで、漫画家・柏木ハルコさんとお話していきます。
柏木　よろしくお願します！
大西　柏木さんは、生活保護に向き合う新米ケースワーカーを描いた『健康で文化的な最低限度の生活』をお描きになられていますが、実はもやいにも取材にいらっしゃったんです。とにかくすごい取材量で、今や生活相談手帳まで読めるようになっている。もやいの生活相談に入っても即戦力でしょうね。
柏木　いえいえ（笑）。ありがとうございます。大西さんは、初の単著なんですね。おめでとうございます。貧困の問題を扱っているのに、とても読みやすい本でした。
大西　ありがとうございます。今回、読みやすさを意識しました。実は、シノドスでもおなじみの日本近現代文学をやっている荒井祐樹さんに、「大西さんの書いたものは読みづらいです」と言われたとこがあって（笑）、すごくその部分は意識したんです。
初の本なので、新書的に制度を説明したり、理論を紹介する本にしようかとも考えていたのですがそうではなく、「貧困」や「生活保護」のような普通に書いたら難しくなってしまうテーマを、入門編として読みやすく書こうと挑戦しました。
柏木　高校生の大西さんが終電を逃した日の出来事からはじまるのですが、物語にスッと入れました。生活保護制度の説明だけではなく、エピソードが中心になっていますよね。今まで興味を持てなかった人も読みやすいでしょうね。
しかも、深刻なテーマなのに、エピソードもすごく面白かったです。特に、７章のネコの話（笑）。笑っちゃいけないんだけど、笑っちゃいました。
大西　いやぁ、もうあれは、本当に大変だった……。
柏木　私も漫画を描くとき直面しているのですが、貧困って、頭では分かったつもりになっても、リアリティを感じにくい。それに、ひとりひとり置かれている状況がぜんぜん違います。
　その点、大西さんの本は、ネコの話もそうですが、大西さんが出会った方とどう関わったのか具体的に描かれているところ、「大西さんと〇〇さんの物語」になっているところが、

今までに無い点だとおもいました。
大西　今までの「貧困」の書き方は、悲劇に見舞われ続けたかわいそうな人だったり、貧困状態から脱却できたぞ！といった成功事例を書きがちです。分かりやすいし見せやすいですから。NPO などでの発信でも、成功事例を大きく取り上げることにより新聞等に掲載され、多くの方に情報を届けることを優先してしまうこともあります。
　でも、そういった「成功事例」というのは必ずしも多くの相談、多くの人の出来事ではなくて、特別な事例だったりもします。当たり前なんですが、支援の現場は、キレイな話ばっかりじゃない。成功事例や良い話に落とし込めないむずかしさとか、上手くいかなさとか、面白さの方が大半ではないのかなと。
柏木　よくわかりますよ。
大西　誰が悪いってわけでもないのに、どうして上手くいかないんだろうって。いったい答えってなんだろう。それを、そのまま書いてみたいと思ったんです。
　ぼく自身、説教臭いのが嫌いなんですよ。たぶん、中二病だからかもしれませんけど(笑)。貧困系だとどうしても「政府が悪い」みたいなメッセージなっちゃいがちで。政府は確かに悪いとは思いますが（笑)、どう悪いのか、何がうまくいかない原因なのか、メッセージを入れないことで、よりメッセージが伝わる気がしています。

個人じゃ限界があった

柏木　なにも知らない若者である大西さんの周りでどんどん事件が起き、それと一緒に、貧困問題について考えていけるような本になっていますよね。いまは、もやいの理事をされている大西さんも、はじめは生活困窮者の支援を「甘く考えていた」というのが興味深かったです。

大西　ぼくは、貧困のことについて全然知らずにこの世界に入りました。生保=生命保険、だと思っていたタイプです。実際に支援に参加するまでは、ホームレスの人が「支援受けたい」と言えば、ちゃんとしたアパートに入れるんじゃないかと思っていました。「どうにかなるでしょ。日本だし」って甘く考えていたんですね。
　で、実際に役所の申請に同行したら、窓口の人は冷たいし、ぼくのような同行者の存在も疎まれる。しかも、すぐにアパートに入れるわけじゃない。まずはシェルターに入れられて、がんばって仕事を探したり、いろいろな環境を整えると、より環境の良い施設やアパートに入居できる……。
　一般的におこなわれている運用だとすぐさまアパートにはなかなか入れない。決していい環境だといえないシェルターや施設に耐えられなくて、せっかく支援につながったのに、路上に戻ってしまう人が沢山いる。
柏木　取材して感じたのですが、大人数の部屋に押し込めるような施設だと、せっかく支援につながれたのに、嫌になって逃げてしまうことも多い。それって、意味が無いですよね。私たちが「ここで暮らしたくないな」と一般の感覚で感じたら、当たり前ですけど、ホームレスの人も嫌なんですよ。
大西　おっしゃる通りです。しかも、役所以外で相談できる場所が少ないことを知りました。困った時にどこに相談していいかわからないんですよね。だから、ぼくは路上で知らない人にどんどん「困ったら連絡してね」と連絡先を渡していたんですね。
柏木　それ、すごい。勇気がいることじゃないですか？
大西　今思うと、なにも考えてなかった。目の前のできごとに何とか取り組んで、毎日役所に同行して、ってやっていました。でも、個人の関係でやるのは無理がありました。
柏木　個人では限界があったんですか？
大西　そうですね。ぼくが忙しいだけならいいんですけど、「力になって欲しい」と思ってせっかくぼくに電話をかけてくれた時に、たとえばぼくが電話に出ることができなかったとして。

公衆電話からだと折り返せないし、すぐさま連絡ができないこともある。そうなると、せっかく勇気を出して相談したのに対応してもらえなかった、裏切られたという経験が出来てしまう。ぷつっと心の糸が切れてしまうかもしれませんよね。

個人で相談を受けるというのは、特に相談が増えてくると、どうしても受けきれない部分が出てきます。だから、ちゃんと時間を指定したり、相談機関としてやっているのがすごく大事。そのような仕組みをつくっていこう、貧困問題を社会化する活動をしていこうとおもい立ちました。

柏木　それで、もやいに関わっていくのですね。

大西　とはいえ、もやいの相談機関だって、来年つぶれるかもしれないし、ずっとある保証はありません。その人が困るタイミングはいつか分からない。だから、本来ならば、安心して相談できる公的機関があった方がいいと考えています。

「ズバズバ聞きますね」

柏木　それと、本を読んでいると、大西さんって人懐っこいのかなっておもいましたね。稲葉剛さん（もやい前理事長）を、本人が嫌がっているのに、「ラビちゃん」って呼びつづけたり（笑)。支援に関わる人ってそういう人懐っこさが必要なんですかね。

大西　善し悪しはあるでしょうね。ぼくは、正直コミュニケーションが得意な方ではないとおもいます。だから、ちょっと失礼になってしまう時もあるのかも。上下とか関係なく、みんなに一定の距離感で接しています。

柏木　わたし、大西さんの相談に同行したことがあるんです。「死のうと思って東尋坊に行ったんです」という人に「飛び降りちゃいました？それともそこにうずくまった？」って淡々とした感じで聞いていて。うわ、聞くんだ！ってびっくりしたんです。でも、滞りなく相談は進んでいったと。

大西　そうですか（笑)。「ズバズバ聞きますね……」ってよく驚かれます。もちろん、踏み込んだ方が楽になるとおもったからやっているんですよ。でも、基本的にサラッと聞きたいって気持ちはあります。

たとえば、相談を受けるとき、職歴、家族歴、犯罪歴、病歴、家族の DV、セクシャリティのことも聞きます。なんでそこまで聞くかというと、病気があるかないか、セクシャルマイノリティかどうかでつなげる支援も活用できる制度や窓口、公的機関に求める合理的な配慮も違ってきます。ですから、すごく必要な情報なんですけど、だからといって、はじめて会った人に言いづらい話ばかりです。

でも、役所ではそれを言わないときちんと対応してもらえないわけですから、どうせ聞き取るのであれば、重いムードで聞くよりも、サラッと聞きたいんです。意外と、みんなサラッと答えてくれます。

だから、「言いづらそうだな」って感じたら、むしろ積極的に聞いてみる。1 時間後に打ち解けてから聞こう、みたいなことをしていると、お互い「いつ聞くんだ」「いつ聞かれるんだ」と変な探り合いみたいになっちゃうこともあるんですよね。もちろん、なぜそれを聞くかをきちんとお伝えしたうえで、ですが。

柏木　なるほど。漫画家と編集者も、そういう関係があります。特に私は性的な漫画を描いていたので、編集者が相談できる人かどうかが大事でした。踏み込んでくれるんだけど、価値観を押し付けてこないとか、私が描こうとする内容に興味を持ってくれているんだろうかとか。編集者の方に聞く準備があるとわかって、ようやく話せる。

大西　興味の有無っていうのはよくわかりますね。夜回りをしていてもそうなんですが、事務的に声をかけてもしょうがないんですよね。「こまっていることありますか」と声かけても「ないよ」って言われるだけです。

でも、そこで一歩踏み込んで相手に興味をもって「顔色悪いですけど、体調はどうですか？」とか「足引きずっているけど、痛いですか？」って声かけするだけで、ぜんぜん反応が違うんですよね。

柏木　それって、面白いですよね。やっぱり人対人なんで、「この人いいな」と思えないと、

シャットダウンしちゃいますよね。
大西　本来は当たり前な話なんですけど、自分が支援する立場だと思うと構えてしまうんですよね。「聞かなきゃいけない」とか「間違っちゃいけない」とか自分自身のことでいっぱいになっちゃう。
柏木　わかります。取材で人から話を聞かなければならないのに「わたし、こんなにおどおどしていて恥ずかしい」と思ったりする。相手の話題じゃなくて「こんな態度でバカにされてないかしら」っておもいはじめて、自分のことばっかり考えちゃう。
大西　そうですね。ぼくたちができるのは、関心を示すことなのかもしれない。「誰かに監視されている」と言われて、「じゃあ、精神疾患の可能性があるので、病院へ行きましょう」って言うんじゃなくて。結論は一緒でも、「ちゃんとご飯食べられてる？」とか「相談できる人いる？」って一歩踏み込んでいくことが必要なのかもしれません。

過程を丁寧に

柏木　そう考えると病気に対する正しい知識も必要ですよね。窓口にきた方が「全般性不安障害と統合失調型人格障害と解離性障害を患ってまして……」みたいに病名をズラズラっと並べたら、自分だったら聞いたこともない病気の方にどうやって接していけばいいんだろうってすごく焦ってしまうと思うんです。
大西　『健康で文化的な最低限度の生活』の１巻にもありましたね。
柏木　制度もいっぱいあるし、正直な話、福祉事務所によって対応もバラバラですよね。「大丈夫ですよ」って言ってあげたいんだけど、言えない。そういう時って大西さんはどうしているんですか。
大西　今は少しずつ知識も経験も積み重なってきましたからだいたいの予想はつくようになりました。でも、最初からそういうわけにはいけません。最初から自分も分からない前提で、「一緒に聞きに行く？」みたいな話をしていました。
柏木　ああ、一緒に考えるんだ。それはいいですね。
大西　ホームレス支援もそうですが、ちゃんとやろうするとかなりハードルが高い。制度のことをはじめ覚えることもいっぱいあるし、つながりみたいなのも必要。だから、次の世代が育たないのかもしれません。
　だから、ぼくは「素人」であることを大事にしているんです。目の前に「お腹が痛い」と困っている人がいたら、「病院にいく？」って声をかけるとか。一般の常識レベルからはじめるのが必要だと思っています。
　今になったら詳しくなっちゃうので「幻聴が聞こえるんだね。じゃあこの病気だね」と決めつけがちです。「引越ししたいって言うけど、厳しい交渉になるだろうな」とか。でも、それって自分の脳内で話しているだけで本人と話していないんです。そういう専門的なジャッジはお医者さんがやることだし、役所の方たちがやることだし、ケースワーカーなど制度を運用する人が判断することです。
　ぼくたちの仕事は、その人がなにをやりたいのか聞くことです。制度上難しいと思っても、「ダメです」とぼくたちが言うことには意味がないと思っています。やっぱり、「無理」って言われ続けると疲れちゃうでしょう。制度上どうしても制限をつける必要があるから仕方ないんだけれども、ぼくらまでそれをいう必要はない。もちろん、無理なことを「できる」と言うことはしませんが、「難しいかもしれないけれども聞いてみようか」が大事なのではないかと思っています。
柏木　すごくよく分かります。でも、その「話を聞く」というだけのことが、本当に難しいんですよね。
　ある人が「引っ越したい」と言った時に、「無理だと思うよ」と返せば、その会話はそこで終わってしまう。「ああ、ここでも無理なんだな」って。しかも、「もっとこうしないと」と気が付いたら説教したりして。でも、もしかしたらその先に他の思いや言葉があるかもしれない。
　たとえば、施設をしょっちゅう脱走する人っていますよね。「そんな脱走なんかしていた

ら、役所の信用が下がるから、いつまでたってもアパートに入れないよ」って傍から見ていると言いたくなるじゃないですか。アパート入居の能力が無いと思われてしまいますからね。

もうちょっと我慢したら……って支援の側は思うわけでしょ。そこで、「なんで脱走したのか」と責めずに聞くのは難しい。

大西　「なんで出たの」って聞くとだいたい「合わなかった」って言うんです。そこで、「みんな合わないけど我慢してるよ」と叱っても意味が無い。

「なにか嫌なことあったの？」「同部屋の人と上手くいかなかったの？」と角度を変えて聞いてみると、お金せびられたとか、たかられたとか。その人自身に発達障害があり周りと衝突しやすかったり。「出てけ」と言われていないのに「出てけ」って声が聞こえていて、統合失調症の症状だったとか、そういう問題が出てくることもあります。

やっぱり、相談されると立場が上になってしまいますよね。説教したくなる。同級生が会社やめても「なんでやめたの」「我慢できなかったの？」「そんな上司文句言えばいいじゃん」とか、励ましているようで、でもそれは上からの指導なんですよね。それって対等じゃない。

相談にくる方や、困窮されている人のなかにはずっと説教されてきた人も多い。何かの理由があって、仕事が出来ないから困窮している。それなのに出来ないことだけを見て責めても問題は解決しません。みんなに責められている人をこれ以上、ぼくたちが責めても仕方ない。ぼく自身が、学生時代「もっとちゃんとしなさい」と怒られ続けられたのかもしれませんが（笑）。

結果をみて判断して説教するのは簡単です。なぜそうなったのか。過程を丁寧にみていかないといけない。説教をして自己満足しても、その人の問題解決につながらない、貧困問題も解決しないんです。

「自己責任」ってどうおもいますか？

柏木　貧困に陥った人と常日頃接しているひとって少ない。だから、多くの読者は「自業自得じゃないか」と言う。でも、本人にとっては不遇な状況だったりする。大西さんは、そういう「自己責任論」ってどうおもいますか。

大西　ぼくは、自業自得じゃない要素を持っていない人って少ないと思うんですよ。みんなが思い描くような、「完全潔白な困窮者」っていない。

柏木　自業自得の部分もあると？

大西　でも、それって当然ですよね。誰だって、「もっと勉強していればよかった」とか「あの時、就活頑張っていたらもっといい企業に入れたかも」「あの人と結婚しておけば……」って人生の選択に失敗はつきものです。自己責任って言いだしはじめたら、誰も反論できません。

柏木　そうですね。人間ってそんなもんですからね。

大西　助けを求める人に対しては、粗さがしをしてしまう。でも、そうやって粗さがしをすることで、自分は不正をただした気持ちになるかもしれないけれど、貧困問題、ホームレス問題は解決しないんですよね。自分自身の考えや感情とは別に、解決する道を模索するのは実はすごく勇気のいることだとおもいます。僕も説教したくなっちゃう気持ちになることはありますし。

ただ、生活保護制度は努力の成果、結果や過程は問わず、単純に一定程度困っていたら必要な支援を支給する制度です。『健康で文化的最低限度の生活』の中でも、昔は年収 2000 万円なのに、生活保護を受けている人がでてきます。「なんで貯金してなかったの」っていう視点は入らない。いま困っているから保護を受けられるんです。そういった、感情や価値観、情緒的な判断が入らない、ということは実はすごく重要なんだと思います。

「自己責任」って言うのは、最強の言い訳ワードなんです。その一言で見ないようにできる。「自己責任」と言われて言い返せる人なんてほとんどいません。自分自身の生活が

100％高潔な人はいないと思うので。

柏木　言われてみれば、本当にそうですね。

大西さんの本に、暴力団の方の話が出てきますよね。あとちょっとで、ってところで、寂しくなって昔の兄貴の誘いにのってしまう。もうちょっと頑張れば……って思っちゃうわけです。あれも、本人の自己責任でしょって言ってしまえばおしまいなんだけど、更正したい気持ちも絶対本当なんだよね。

大西　そうなんですよ。更正したい。でも、「自分らしく生きたい」ってみんなおもっている。だれだってそんな感情はありますよね。

　ちなみに、柏木さんは、ぼくたちからするとカウンターの向こうにいる福祉の生活課の取材も行っています。取材の中で感じられたことはありますか？

柏木　若い人の方が、偏見が大きい印象をうけました。やっぱり自分たちは頑張って安定した仕事を得たと。でも、なんで頑張っていない人にお金をあげなきゃいけないのと感じている。でも、年を取るにつれ、「人生いろいろ」って分かっていく。

大西　若者の方が、貧困にリアリティがあるのかと思っていました。

柏木　もちろん、ケースワーカーさんはきちんと教育を受けているので、一般の人よりは勉強しています。それでも、入ってすぐのワーカーさんは「なんでお金がないのにスマホ持っているの」と言う。でも、だんだんスマホがないと仕事ができない状況が分かってきます。外から非合理に見えても、きちんと見ていけば、それぞれの行動にはきちんと理由と合理性があるんです。

大西　よくわかります。この本でも言いたかったんですが、誰かが悪いってことじゃないんですよ。困っているその人が悪いとか、その人に対してうまく支援できない行政が悪いって話じゃない。それぞれが一生懸命やっているんだけど、うまくつながらない。

柏木　実際はそんな感じなんでしょうね。いろんなところですれ違ったり衝突が起きたりしているけど、誰もが完璧ではないし、誰もが一所懸命やっている。

大西　だからこそ、ぼくたちのような「素人」が間に入る意味があるのかなっておもいます。それでも、上手くいかないことの方が多いんですけどね。

柏木　うんうん。よくわかります。大西さんの『すぐそばにある「貧困」』はその上手く行かなさを含めたリアリティを描いているから、貧困を身近に感じられる。

大西　ありがとうございます。貧困を「すぐそば」に感じられるような本になっていると思うので、ぜひ読者のみなさんも手にとってみてください。

すぐそばにある「貧困」　著者：大西 連　出版社：ポプラ社(2015-09-08)　定価：￥ 1,620　Amazon 価格：￥ 1,620　単行本（ 269 ページ ）　ISBN-10 ： 4591146561　ISBN-13 ： 9784591146569

大西連（おおにし・れん）　NPO 法人自立生活サポートセンター・もやい　1987 年東京生まれ。NPO 法人自立生活サポートセンター・もやい理事長。新宿での炊き出し・夜回りなどのホームレス支援活動から始まり、主に生活困窮された方への相談支援に携わる。東京プロジェクト（世界の医療団）など、各地の活動にもに参加。また、生活保護や社会保障削減などの問題について、現場からの声を発信したり、政策提言している。初の単著『すぐそばにある「貧困」』(ポプラ社)発売中。

柏木ハルコ（かしわぎはるこ）　漫画家　漫画家。1994 年小学館ヤングサンデーでデビュー、主に青年漫画誌で執筆を続ける。現在小学館の週刊ビッグコミックスピリッツ誌上にて生活保護のケースワーカーの日常を描く「健康で文化的な最低限度の生活」連載中。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町 5-33　社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会　社会政策研究所発行